

森 千香子著

## 『排除と抵抗の郊外』

——フランス〈移民〉集住地域の  
形成と変容』

評者：鈴木 宗徳

本書が扱っているのは、フランス大都市の「郊外」に集住する〈移民〉たちに対する差別と排除、そして彼ら自身による抵抗の実態についてである。このフランス「郊外」が注目される出来事が、近年ふたつあった。まずすぐに思い浮かぶのが、2015年の二つのテロ事件である。1月には風刺週刊誌を発行するシャルリー・エブド社で12人が殺害される襲撃事件が起こり、次いで11月にはパリおよび郊外サン・ドニで死者129人を出す大規模なテロ事件が起こっている。フランス政府は「テロに対する戦争」を宣言し、イスラーム国への空爆を開始、国内では非常事態宣言が発令され、数千件の家宅捜索が開始された。このときたびたび報じられたのが、ヨーロッパで育った移民2世・3世の若者たちがいわゆる“ホームグロウン・テロリスト”になるという事例である。しかし、彼ら自身が、こうしたムスリムをターゲットにした家宅捜索によってますます疎外されていくといった実態については、残念ながらあまり注目を集めたとは言えないだろう。

そこで思い出すべきは、ちょうどその10年前に起きたもうひとつの出来事、2005年10月から11月にかけてフランス各地の「郊外」で多発した〈移民〉の若者たちによる大規模な暴

動である。このときは3週間で1万台の車両放火がなされ、3,000名もの逮捕者が出ている。そのきっかけは、警察の職務質問を逃れようとした若者が変電所に入り感電死したことであったとされる。警察に日常的に監視され、職務質問をくり返し受けてきた「郊外」の若者たちの怒りが爆発したのである。

では、国家権力に対する彼らの怒りはどのように蓄積・増幅していったのか。本書は、10年の時を隔てた2つの事件についてもっとも内在的な解説論文を数多く著してきた、この分野の第一人者による待望の単著である。著者は1999年よりパリ郊外のセヌ・サン・ドニ県オベールヴィリエという典型的な「郊外」でフィールドワークをつづけ、そこで実施された政府による都市政策の問題点を洗い出し、さらに、フランス国内の政治的言説のなかで「郊外」がどのように表象されてきたかを批判的に検証している。そうした多角的な視座からの分析を、ようやくまとまった本のかたちで読むことができるようになったのである。著者が明らかにしているのは、差別や排除が起こる複合的なメカニズムであるとともに、主流派社会がマイノリティを表象するときの綺麗事に満ちたきわめて傲慢な論理の数々である。かくして本書はすでに渋沢・クロード賞特別賞と大佛次郎論壇賞のふたつを受賞し、各所で高い評価を受けている。

### 1 〈移民〉と「郊外」、都市政策の帰結

本書を貫く著者の立場は、「文明の衝突」図式にみられる「イスラームの脅威」を煽るような文化本質主義的解釈を拒否するというものである。〈移民たち〉をムスリムと名指して他者化する態度こそ、むしろ治安管理をおこなう権力にとって好都合であろうが、〈移民〉の2世や3世の多くはむしろフランス的価値観を十分

に内面化していると、著者は指摘する。フランスで教育を受け、フランス語を話し、フランス国籍をもつ彼らは、「自由・平等・博愛」の精神を学び、しかしそれでも差別されるという「不平等」に憤っているのである。その意味で、彼らをなお「移民」と呼ぶことさえ問題をはらんでいる。

フランスでは1960年代以降、旧植民地諸国から多くの出稼ぎ労働者を受け入れてきた。1974年に不況のため移民受け入れは停止されるが、そのことが逆に家族呼び寄せと定住化を促進することとなる。そのころ空室が増えていった「郊外」の公営団地へ移民の家族を入居させる政策がとられるが、中産層が持ち家を取得して退去していくため「郊外」の貧困化が進み、80年代後半から〈移民〉の存在が可視化されてゆく。非ヨーロッパ系移民の失業率はフランス全体の失業率の2倍以上であるとされるが、「郊外」で育った若者たちはアラブ系であるがゆえの就職差別に加え、郊外出身者であることによる二重の差別を受けるようになる。

本書の第一の特長は、政府の「都市問題」対策、すなわち都市政策や住宅政策がもたらす皮肉な帰結を丁寧に描き出している点にある。問題の真の原因は貧困であるはずなのに、貧困層の集住、すなわちセグレーションやゲットー化が原因であると解釈され、これを解消する「ソーシャル・ミックス」政策が推進される。異なる階級が同一地域で共生することで、中産階級の規範・意識・生活習慣が下層階級に好影響を与えると主張されたのである。これは、階級問題であったはずのものが「住民の治安悪化」といった「都市問題」へと縮減されてゆくことを意味している。

しかし、ソーシャル・ミックスは成功しなかった。著者の調査によれば、都市再生事業は（長年住んでいる！）「移民」よりも「地元住

民」を優先させ、貧困層を別の場所に移動させるだけに終わっている。著者はそこで、人種やエスニシティなど集団間の差異を認識せずに平等に扱う「カラー・ブラインド」の原理が政策文書などに適用されているにもかかわらず、その実態は「カラー・コンシャス」であるという、建前と本音の乖離を指摘する。この政策のほんとうの目的はエスニック・マイノリティの集住を解消することであったし、たくさんの移民を受け入れてきたオベールヴィリエでさえ、「地元住民」優先の政策が推進されたのである。外部から中産層の住民や企業を誘致する政策は、〈移民たち〉に「自分たちが忌避されている」という意識さえ内面化させてしまった。

## 2 暴力というラベリング、共同体主義というラベリング

本書の第二の特長は、「郊外」における様々な抵抗運動の存在に目を向けている点にある。とくに2005年の大規模な暴動以降、若者による政治アソシエーション活動がはじまってゆく。〈移民〉に投票を呼びかける「選挙リスト登録運動」や、地方選挙ですべてエスニック・マイノリティの候補を立てた「オベールヴィリエ100%」の活動が、これにあたる。これらは「地元住民」の再定義を迫る運動でもあり、その意味でカラー・コンシャスな運動でもあったとされる。

しかし、著者がもっとも注目するのは、国家や警察を批判し資本主義を批判する歌詞を叫ぶラップという抵抗の形態である。90年代後半以降、ラップの歌詞が「暴動を示唆した」「警官への暴力を呼びかけた」としてラッパー・グループの起訴が相次ぐようになる。ラッパーたちはその暴力的イメージゆえに警戒の対象とされるが、こうした抵抗が生まれるのは国家や警察による暴力が先に存在しているからに他なら

ない。

「郊外」の問題はそれがテロリズムや原理主義に結びつけられることによって、ますます暴力的なイメージを付与されるようになる。2015年のテロ事件以降、政府はその対策として「ライシテの促進」と奉仕活動など道徳教育の強化を狙った改革を進める。その背景にある考え方は、フランスの価値観を受け入れない異質なマイノリティ文化に脅かされて、「共和国モデルの危機」が訪れているという構図である。フランスの政治的言説においては、「個人の選択の権利」を重んずる「共和国モデル」——公共空間から宗教性を排除するライシテの原理もその構成要素である——にとって、「共同体の権利」を重視する「多文化主義」を脅威とみなす図式が反復されてきた。だからこそ政策文書はすべて「カラー・ブラインド」を建前とする語り口にならざるを得ないのであろうが、エスニック・マイノリティを差別する「カラー・コンシャス」な考え方が婉曲話法のかたちで文書に紛れ込んでいることを、著者は厳しく指摘している。

そのさい、はじめに述べたようにイスラームに回帰する若者たちの行動を文化本質主義的に解釈しては、こうした支配的言説に取り込まれることになってしまう。主流文化は「ムスリム・コミュニティ」の「共同体主義」を脅威とみなすが、実際には彼らは十分に「共和国モデル」の個人主義を内面化しており、だからこそ、それでもなお差別されていることに怒っているのである。それどころか、彼らに「共和国モデル」の価値観を押しつけることは、彼らの孤立化と断片化を深め、結果として社会・経済的統合の足かせになりかねないと著者は警告している。

### 3 差別と排除への応用

末尾で著者自身が指摘しているように、本書で用いられる分析視角の多くは日本の移民研究に应用可能である。現在、多くの南米出身の工場労働者が各地の公営団地に集住している。また、フランスで見られるイスラームフォビアは、本書が明らかにするように建前と本音の入り混じった傲慢な論理にはほかならないが、こうした分析はポピュリズムと排外主義が結託する現在の状況を理解するうえでも、きわめて有益である。その意味で、統治する側の論理がはらむ欺瞞性を実態に即して詳細に検討している点が、本書のもっとも大きな魅力であると言ってよい。たとえば「セグリゲーションの解消」「共同体主義による脅威」といったもっともらしい言説を相対化しようとする観点は、専門研究者だけでなく社会科学を学ぶ多くの学生にとって考えさせられるところが大きいはずである。

紙幅の多くを割いて説明しているわけではないが、文化本質主義を退ける著者の主張の核心は、格差や貧困を克服しないかぎり、〈移民たち〉の苦しみも、彼らを蔑視したり脅威とみなす言説も無くなりほしくないという、きわめて明快なものである。このごくあたり前の主張がいかに見失われがちであるかという問題を逆説的に気づかせてくれるのが、本書から学んで日本社会に应用すべきもっとも重要な観点だと言ってよいかもしれない。

(森千香子著『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会、2016年3月、vi + 325頁、定価4,600円 + 税)

(すずき・むねのり 法政大学社会学部教授)